

利根川 越後沢右俣

2003年7月26日～28日

上松田 大内 吉田（記）

今回の沢は、「八百間ノ大滝」と呼ばれる大滝の登攀がポイントである。今年は雪渓が多そうなので、大滝に取り付けるかどうかが少し心配である。例の通りに、湯檜曾駅の構内で入山祝いをしていると、小暮さんが目に入った。お客さんを沢にガイドするために来たそうである。小暮さんと連れの男性一人が仲間に入り、宴の場が何時もよりも盛り上がった。

7月26日 曇り

湯檜曾駅から車を走らせて矢木沢ダムに着くと、松田さんがゴム製のシート状のものを地面に降ろして広げた。そして空気入れで空気を入れ出した。そうです、今回は松田さん所有のカヌーでダムを渡ろうという目論みです。膨らんだカヌーはなかなかしっかりしていて頼りになりそうに見えた。我々3人と装備を積載してもちゃんと浮いていた。さらに驚いたことは、3人で漕ぎ出すと結構な速度で進みだしたことである。これならば、無事にダムを渡れると確信した。途中モーターボートが横を通り過ぎていく時に発生する波で揺れるのが少し怖かったが、それ以外は快適である。何よりも、こんなに近くに水面

があることが嬉しかった。松田さんに「吉田さんのパドルには全然力が入っていないよ」と云われながらも漕ぎ続けること2時間で、バックウオーターに到着した。

今日の利根川の水量は、一昨年来た時に比べて格段に多い。カヌーを一段高いブッシュ帯に運んで固定してから、装備を身に付けて出発した。水の豊富な流れを右に左に渡り返しながら進んだ。途中で生簀状の所に魚が群れていたのので、帰りにはここで釣ろうと決めた。

最初のうちは至極順調に進めたが、シッケイガマワシのゴルジュ帯でやはり心配していた雪渓が出てきた。右岸の草付きから高巻いた。その後も雪渓が途切れ途切れに出てきて時間を取られた。

越後沢の出合に着いたのは13時半であった。釣師4人組が先着していて、先にいくかどうかで迷っていた。釣師が様子を見に行ったので、我々はねぐらの準備に取り掛かった。二つある高台の下の方は、釣師が戻ってきた場合のために、彼らのために残して、我々はそのほうを選んだ。4人組が戻って着たら釣は期待できないだろうと思っていたので、彼らが戻って来た時には、少しがっかりした。本流は彼らが既に竿を出した後なので、越後沢のホンの小区間を釣った。それでもなんとか、9寸程の岩魚を釣り上げることができたので、今回はこれ

で良しとした。

コースタイム

矢木沢ダムからカヌー（7時20分）→バックウォータ
ー（9時20分→10時00分）→越後沢出合BC（1
3時30分）

7月27日 曇り時々晴れ

今日は時間がかかりそうなので、やや早めに出発した。初めのゴルジュは、一箇所だけ左岸からの高巻きを強いられたが、それ以外はへつりて突破することが出来た。十分沢出合を過ぎると雪溪が出てきた。切れ切れの雪溪を6個やり過すと二俣に着いた。右俣に進むとまた雪溪が出てきた。右岸からその先にある2つの雪溪ともども続けて高巻いた。その先にも切れ切れの雪溪が続いていた。少し大きめの雪溪は右岸から高巻き、大きな滝の下で沢に降り立った。これ以後も雪溪は続くが、これより先は上を歩いても問題ないほどの厚みがあるので、歩行は大分楽になった。

しばらくすると、はるか前方に大滝の上段が見えて来た。9時ジャストに大滝取り付きの雪溪上に着いた。大滝の下段はスノーブリッジの下になっていて、中段と上段が表に現れていた。滝と雪溪の間には大きなシュルンドが口を開けていたので、どこか降りられそうなところ

がないものかと探したところ、右壁の水流に近いところが、5メートル程の懸垂で降りられそうに見えた。早速、3人でスノーボラードを作製して、それを支点にして、バックアップの確保を取りつつ、懸垂した。全員無事に降りて、中段下のテラスにあつまつたのは9時半である。小休止の後、松田さんが登り始めた。岩は逆層で悪そうに見える。直上は難しそうなので始めはトラバース味に登っていった。どこで軌道を修正していくのだろうかと見ていると、どんどんトラバースしていくので、松田さんはどこへ行くのだろうかねと、大内さんと一著に首を捻った。大分進んだところで向きを変えて本来のルートの方へ登っていったのでホッとした。大内さんに続いて自分がラストで登った。

2ピッチ目は、水流沿いからも登れそうに思われたが、松田さんは右の灌木のなかに入ってしまった。ザイルが一杯まで伸びた後、大内さんと私が距離を少し置いて同時に登った。垂直の灌木帯を一生懸命に登っていると、雷の音が聞こえた。しばらくして、また雷のような音が聞こえたと思ったら、落石のような音が続いたので、灌木の間から、滝の水が流れている方向を見ると、雪溪のブロックがガンガン落ちているのが見えた。ここに落ちてくることの無いことは頭では分かるが、恐ろしい光景で

あつた。もし、水流沿いに登攀していたならば、我々の命は無かつたかも知れないと思うと、ぞつとした。ブロック崩壊は、その後も数分間に渡つて断続的に続いた。

上段の滝の出だしは立つて歩けるほどの傾斜しかない。その所に例の崩壊した雪溪の残骸があつた。始めの3ピッチほどは、難しいところがなさそうなので私がザイルを引いて登つた。最後のピッチを大内さんがリードして、大滝を完登した。時計を見ると15時近くになつていた。中段に登り始めたのが9時50分だから、登攀に5時間かかつた計算になる。えらく時間がかかつてしまった。登攀技術とザイルワークを鍛え直さないといけない。

ここから滝を二つ越えると、上部の雪溪にでた。雪溪の上には脆そうな奥壁が広がつていた。左にある中間尾根に登るルートを探しながら、雪溪の上を進んだ。しばらく行くと、尾根に突き上げる浅いルンゼが見つかつたので、それを登つて尾根に出た。ほとんど獣道のような尾根を二人に遅れつつ、ひいひい言いながら降りて行つた。二俣に着いた頃には暗くなり始めていたが、それでも、ヘッデンなしで雪溪を抜けられることが出来たのは良かった。途中にビバークできそうなどこがあり、松田さんからどうするかと聞かれたが、BCまで行くことにした。真つ暗な中、ヘッデン頼りに怖い思いをしながら

の下降であつたので、無事にBCに着いた時には本当にほつとした。

コースタイム

BC (5時30分) ～大滝取り付きの雪溪上 (9時00分) ～大滝中段のテラス (9時30分～9時50分) ～大滝中段上 (12時50分) ～大滝上段上 (14時50分) ～BC (20時15分)

7月28日 晴れ

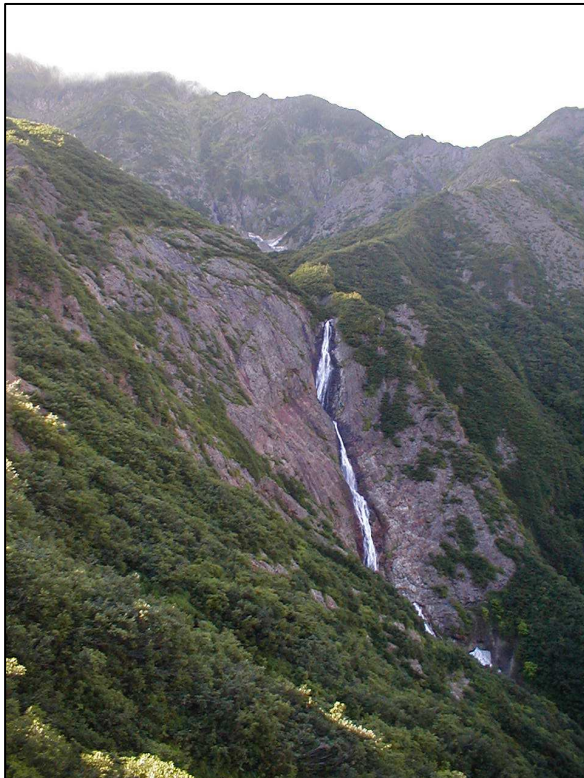
今日は、のんびりした出発である。水量は依然多いので、渡渉は慎重にした。例の雪溪は左岸よりまとめて高まいた。高まきの長さから推して、雪溪は150メートルほど断続的に続いていたと思われた。途中左岸より小沢が流れ込むところで、30分ほど釣タイムをとつた。当たりは殆ど無く。私が本流で小岩魚、大内さんが小沢で中岩魚を釣つただけであつた。さらに降つて例の生簀状の所に群れている魚にも針を垂れたが、釣れたのはハヤであつた。

その後は、渡渉を繰り返しながら淡々と降る。所々で、日干しになつたハヤが石の上に見られたが、これは、釣師の仕業である。彼らの目的は岩魚なので、外道であるハヤが岩魚より先に餌に食いついてくるのに腹を立ててこのようなことするのである。持ち帰らないのならば、



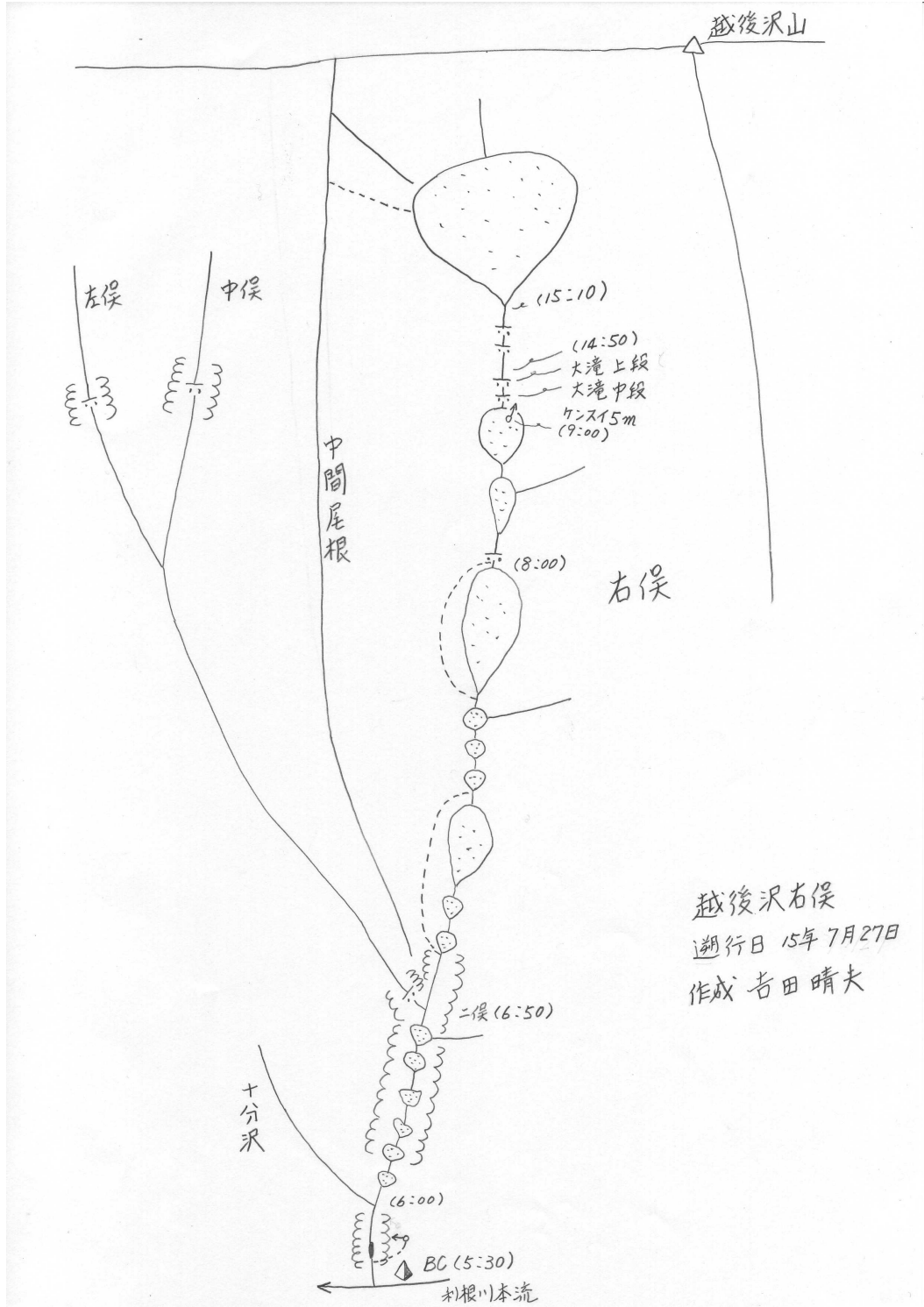
大滝上段を登攀する吉田

リリースすれば良いのと思う。
カヌーのところには12時半頃に着いた。カヌーの前で記念写真を取ってから利根川のバックウオーターを後にした。帰りは向かい風が吹き付けてくるので、行きほど順調には進まないが、それでも2時間40ほどでダムに到着した。



中間尾根より大滝を望む

コースタイム
BC(8時00分) ～バックウオーター(12時25分)
～12時50分) ～カヌーで八木沢ダム(15時30分)



越後沢右俣
 溯行日 15年7月27日
 作成 若田晴夫